

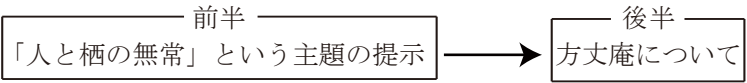
第一章 「人と栖」の無常 - 方丈記のあらまし -

「小さな家」とは？ … 人が充実した生活を送るのに豪邸は必要？

└─> 自分にとって本当に大切なものを身の回りに置くことこそが自分らしい暮らしの表現になるのではないか

そこで、『方丈記』を読み解くことによって、方丈庵という小さな家に込められた暮らし方、生き方をめぐる思想を探り出すとともに、現代を生きる私たちにとって重要な「住みかとは何か」という問いを考えていく

『方丈記』・・・都のはずれに小さな庵を結び、1人そこで暮らす様子を描いたもの



方丈庵・・・3m×3mの約4畳半の家。「最後を迎える家」としてつくられ、組み立て式（モバイルハウス）である

第二章 鴨長明の生涯

- 誕生から父の死まで
 - ・鴨長継の次男として生まれた鴨長明は、9歳の時に中宮叙爵により従五位下に叙せられる。
 - ・父・長継が長明が20歳の時に亡くなる。父の死をきっかけに生家を離れ、祖母の家に住むことになる。
 - ・30歳を過ぎたころに祖母の家とも関係が悪くなり、離れることになる。（第一の庵）

- 歌人として評価される
 - ・東大寺の僧である俊恵と師弟関係を結ぶ。これにより交流が広がる。
 - ・35歳のころ、『千載和歌集』に長明の一首が収められ、勅撰歌人の仲間入りを果たす。

- 管絃の道へ
 - ・長明が歌の道と並んで力を入れていたのが音楽。
 - ・後鳥羽天皇や源頼朝も列席した落慶法要で太鼓をたたいた有安から弟子として認められる。

- 後鳥羽上皇の登場
 - ・40代になり歌人として脚光を浴びていた長明は、後鳥羽院の文化サークルの一員に抜擢される。

- 和歌所の設置
 - ・和歌所・・・勅撰和歌集の編纂などのために、宮中に臨時に置かれる役所
 - ・新しい勅撰和歌集の撰集のため、寄人として長明を含む15人が選ばれる。

- 『新古今和歌集』の編纂
 - ・長明は「三体和歌会」という困難な命に参集を行った
 - ・「大内の花見」をきっかけに、後鳥羽院や源家長らとともに歌を詠み、音楽を楽しんだ

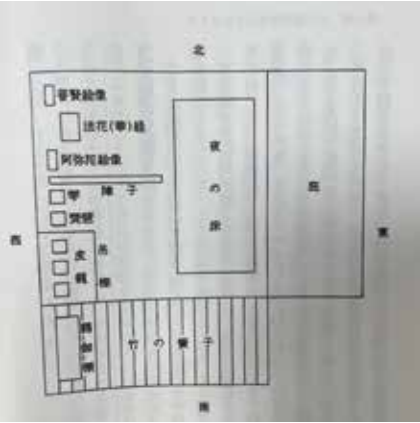
- 突然の出家
 - ・長明は父が禰宜を務めた神社の禰宜職に任命されるが、鴨祐兼により阻止される。
 - └─>一度はあきらめた「実家」である下鴨神社へ戻れる道筋が途絶えたことで姿をくらました

- 行方不明になった長明
 - ・『源家長日記』によると、長明は東山に籠ったのち本格的に大原に移ったとされてる。（第二の庵）
 - ・長明は師匠である有安から秘曲を皆伝される前に弾奏してしまい、抗議を受けたことも出家の理由。

- 日野に移り住む
 - ・方丈庵を建てた。（最後の庵）
 - ・『無名抄』『発心集』『方丈記』を書いた。

第三章 方丈庵に持ち込まれたモノ

- 方丈庵の見取り図
 - ・東側は庇も含めて通常の生活の場になっている。それに対して西側は北側に出家の身にふさわしく仏間的な部分が置かれ、南側には和歌、管絃といった文化的な部分が配置されており、精神生活の場ということになる。
 - ・西側が開けた土地に方丈庵を設置している。
 - └─>西方浄土への強い思いから
 - ・日野山に設置されており、まったく人里離れた場所ではない



- 選ばれたモノたち
 - ・北西のコーナーは、阿弥陀如来、普賢菩薩、『法華経』と仏教空間としての明確な性格が浮かび上がっている。
 - ・東側には寝床。食事などもする居間的な空間と考えられる。
 - ・西側には「和歌・管絃・往生要素の抄物」、琴、琵琶が置かれた文学と音楽の空間

- 南西のコーナー：文学と音楽関係
 - ・南西に置かれた楽器も方丈庵同様、組み立て式である。 →長明自身が手作りしていた可能性も考えられる。

- 臨終としての方丈庵
 - ・長明が臨終の床についたとき、目にすることができるのは、西側に掛けられた阿弥陀像、『法華経』を置いた経机や普賢菩薩像であり、楽器や文学に関するもの（趣味のもの）は障子で仕切られ見えなくなっている。
 - ↓
 - 方丈庵は修行の場所であるとともに、最後を迎えるための臨終の場所

第四章 方丈庵ができるまで - プロトタイプと完成形 -

- 『方丈記』のさまざまなテキスト
 - ・『方丈記』は広本（この本はこちらを原本としている）と略本に分けられる。

	広本	略本
方丈庵の材料の記載	なし	あり
庇、閤伽棚の記載	あり	なし
普賢や琴、琵琶の記載	あり	なし
高さの記載	あり	なし
家の材料	車2台分	車一台分にも満たない

略本は書き加えられている部分があるが、広本よりも前に成立していることから『方丈記』の草稿と考えられる。

↓

略本に書かれている方丈庵は方丈庵のプロトタイプであり、試作的な設計図であった可能性が高い

- 略本『方丈庵』草稿説
 - ・建てえる場所は考えておらず、素材から考えていた。（組み立て式というイメージはなかった）
 - ・間柱を入れて、強度を高めていたが一丈の柱間は広すぎると考え最終的な一丈四方になった。

- 「草の庵」から「方丈庵」へ
 - ・長明は略本『方丈記』を書き、大原に在住する僧に見せ、方丈庵をブラッシュアップしていった
 - ・大原で制作を始めたが、イメージに適した場所が見つからなかったため日野山に移動することになる。

- 屋根と壁 - 開口部
 - ・車二台で運搬していたことから、勾配が2面で済む切妻を採用していた。
 - ・外壁は柱の間に壁パネルを建てて、留め金で固定していた。
 - ・扉は主に引き戸もしくは引き違い戸を採用していた。

第五章 再生の地、日野山

■方丈庵の周囲

- ・近くの山林から採ってきた小枝と川から水を引き作った池のそばで食事の準備などを行った。
- ・浄土は西の中にあると考えていたため、西側の風景を大切にしていた。
- ・方丈庵は孤独ではあるものの、外界と隔絶された空間ではない。

■方丈庵への愛着

- ・方丈庵は往生のための住まいであるから、死までの時間をいかに過ごすかも重要なテーマである。
- ・「死の形」を自らの小さな家で構想したことにより、自らの死のイメージを具体化ができ充実した生活を送っていた。

第六章 『方丈記』のルーツ

■ルーツとしての『池亭記』～『池亭記』の構成と内容

- ・「都市の状況→理想の住居→そこでの暮らし方」という構成が『方丈記』と似ている。
- ・『池亭記』も『方丈記』と同じように「往生の空間」を意識している。
- ・『池亭記』の著者である保胤と同時期に活躍した源信も『往生要集』を書き上げ、極楽往生を布教させていった。

↓

長明は時代を超え浄土教信仰とそれに基づく「往生の空間」の思想が、『方丈記』に流れ込んできている。

第七章 方丈庵を継ぐもの - 数寄の思想 -

■数寄とは何か～長明による定義

- ・数寄
 - └ 華道や茶道など風流・風雅を指す言葉（現代）
 - └ 色好みの意味で「好き」（平安時代）
 - └ 風雅を愛すること（鎌倉時代以前まで）

『無名抄』と『発心集』の数寄を比較すると、『発心集』では『無名抄』における数寄を一步進めて極楽往生への専心ぶりと重ね合わせて捉えられているように感じられる。

↓

歌論書を通じて長明にとって「数寄」とは歌や音楽、信仰に没頭しつつ、執着から自由になるという一つの到達点になった

■長明に対する後世の評価～数寄屋とお茶屋

- ・鎌倉中期の説話集『十訓抄』では、長明について数寄の人として評価し、方丈庵を「数寄の場所」と捉えている。
- ・「数寄の場所」として室町時代特有の「会所」や金閣・銀閣、茶室にまで方丈庵の思想が受け継がれている。

第八章 江戸期の小さな家 - 芭蕉・良寛・北斎 -

■芭蕉

- ・俳諧の行き詰まりを感じ移住する。やがて芭蕉庵と呼ばれるようになる。
- ・その後二代目芭蕉庵→幻住庵→三代目芭蕉庵と住むことになる
- ・芭蕉はそれらの住宅の中に必要最低限のものだけを身近に置いて生活していた。（現代のミニマリストのよう）

■良寛

- ・良寛は仏道修行の際に生きるために必要最小限のもの以外はすべて捨て去るべしという教えを受ける。
- ・良寛は周囲から孤立した五合庵に住むが、最終的には地域の人々に囲まれて生涯を終えた。

■北斎

- ・画室が散らかったら引っ越しをする生活。北斎にとって6畳の部屋は充分であった。

彼らが過ごした「小さな家」はミニマムでありながら途方もないエネルギーを放っていた

第九章 ソローの「森の家」

- ・ソローは当時の生活があまりにも多くのものに囲まれていることに危機感を覚え、自ら家を建てることで自分に必要な住みかとはなにかを具体的に再考した。
- ・必要最小限のものしか持ち込まないことで周辺の豊かさを享受することができ、そこで暮らす豊かさを感じることができる。
- ・孤立した家に籠るのではなく、拠点としつつ周辺と広い交流を持っていたことが長明と共通している。

第十章 現代の「小さな家」

■増沢洵の九坪ハウス

- ・プランを3間×3間の正方形とし、吹き抜けを作ることによって階高を抑えている。
- ・吹き抜けの写真、階段の詳細と共に家具の印象が強いのが魅力の作品
- ・1999年にリデザインされ、希望者にはコピーが建てられるほど皆に愛された最小限住宅である。



■清家清の「私の家」

- ・50㎡の住宅で、家族がいつ、どこで何をしてるかわかり、来客が来ると、皆同じ空間にいる親密さを感じる。
- ・リビングを横断するトラスや移動量の家具、外へそのまま広がる石張りから芝生への外部仕上げなど、内外の流動性が演出されている。



■五階建てですべて一室「塔の家」

- ・延べ床面積65㎡で五階建ての小さな家は珍しく、最上階にいても親が帰ってくるとその様子が感じられ、空間に一体感がある作品。

■なぜモノがあふれるのか

- ・収納場所があるために、モノがあふれている
- ・日本人は他の民族や国と比べて家財が多く、家が広くても家族にとっては狭くなっているのが特徴。
- ・モノひとつひとつと住人が、意味のある濃密な関係を持っていることが重要である。



■断捨離のすすめ

- ・もう意識することもなく場所をふさいでいる多くのモノを捨てることにより、手元にあるモノの価値に気づく
- ・愛するモノと暮らす

■小さな家のトポス

- ・我々は家を建て、その家を中心に新たな生活を送るが、最終的には家のトポスに縛られることになる。
↳ 必要以上に増えてしまうモノに支配されてしまうから。
- ・小さな家でも人々との交流やネットワークがしっかりしていればどこでも過ごすことができる（方丈庵のように）

■現在の方丈庵とは

- ・方丈庵を現代に蘇らせるとしたらキャンピングカー
- ・人が寝だけの広さと、歩いている自分が隠れるほどの高さを持つ家を背負って歩く「家をせおって歩いた」



■最小の家を考える

- ・最小の家は傘かもしれない
- ・必要最低限のもの、住む人が愛するモノに囲まれて過ごすし、人と人のふれあいから生まれさらに環境から守られた暮らしの入れ物こそが「小さな家」の求めていることである。